

8月2日のレッスン

イエスとトマス

鍵となる聖句：「それから、イエスはトマスに言われた。『ここに指を当てなさい。私の手を見なさい。手を伸ばして、私の脇腹に当てなさい。疑うのをやめて、信じなさい。』
ヨハネによる福音書 20:27

選読箇所：
ヨハネによる福音書 20:24-29

使徒トマスは、しばしば「疑い深いトマス」と呼ばれます。しかし、今日の聖書箇所は、霊的な成長の過程にある一人の弟子を描いています。トマスは、イエスが他の弟子たちの前に初めて現れた時、その場にいませんでした（ヨハネによる福音書20:24）。他の弟子たちが「私たちは主を見た」と証ししたとき、トマスは兄弟たちの話を信じる前に、証拠を求めたのです。（ヨハネによる福音書20:25）彼は、釘の跡を自分の目で確かめ、傷跡に手を触れたいと願った。それは冷酷に聞こえるかもしれないが、それは人間らしい反応でもある。悲しみの後、人は新たな希望に惑わされることを恐れることがよくある。トマスは、イエスが復活したという言葉を目撃的に受け入れるつもりはなかった。彼は、他の弟子たちが経験したのと同じように、自ら直接体験したかったのだ。ヨハネ 20:19,20

8日後、弟子たちは再び戸を閉めて部屋にいた。（ヨハネによる福音書20:26）イエスの復活によって、彼らの恐れが一瞬にして消え去ったわけではなかった。それでも、イエスはやって来て、「平安あれ」と言われた。師であるイエスからのこの優しい言葉は、ヨハネ、ペテロ、パウロによる新約聖書の書簡において、初期教会への として、一般的な挨拶となるのである。トマスに話しかける前に、イエスは部屋中の不安を和らげながら、貴重な教訓を授けた。 信仰とは、恐れていないふりをするものではありません。それは、私たちの心の扉をくぐり入ってくる、復活されたキリストを信頼することです。

その後、イエスはトマスの方を向き、私たちの「鍵となる聖句」の言葉を再び述べられました。「ここに指を当てなさい、……手を伸ばしなさい」と。これは、トマス自身が信じるための条件として挙げていた言葉に呼応するものでした。（ヨハネによる福音書20:27）イエスが復活されたことを当初疑ったのは、トマスだけではありませんでした。イエスの復活の日、弟子たちは皆、疑いを持っていました。彼らは女性たちの報告を信じようとしなかったのです。ルカによる福音書24:11

ルカによる福音書には、さらに次のような記述がある。「イエスご自身が彼らの真ん中に立たれ、彼らに言われた。『平安あれ。』しかし、彼らは恐怖と驚きに襲われ、幽霊を見たのだと思った。そこでイエスは彼らに言われた。『なぜ動揺しているのか。なぜ心に疑いが生じるのか。私の手と足を見なさい。私だ。触れて確かめなさい。幽霊

には、あなたがたが見ているような肉や骨はないからだ。』　こうして言われた後、イエスは彼らに御自分の手と足をお見せになった。それでも、弟子たちは信じられずにその場に立ち尽くし、喜びと驚きに満たされていた。そこでイエスは彼らに尋ねられた。「ここに何か食べるものはあるか。」ルカによる福音書 24:36-41

イエスがすべての弟子たち、そして私たちに伝えたメッセージは、トマスに与えたものと同じです。「疑う者ではなく、信じる者になりなさい。」（ヨハネによる福音書20:27）疑いは混乱や苦痛をもたらすこともあります。ここでの問題は忠誠心でした。トマスはイエスに身を委ねるのか、それとも引き続き距離を置くのか。信仰とは疑問がないことではなく、答えを求めつつ、自分の人生をイエスの御手に委ねることです。

トマスは躊躇することなく、復活されたイエスに対して、「私の主、私の神」（ヨハネによる福音書20:28）という、最高潮に達した告白で応えました。ここでトマスは、イエスの復活を認めただけでなく、その師を「主」として認めたのです。イエスは、それ以来のあらゆる世代に向けて、次のような深遠な言葉でこの箇所を締めくくっています。「見ないで信じる者は幸いである。」（ヨハネによる福音書20:29）私たちは、イエスの傷跡に実際に触れることは決してできません。しかし、使徒たちの証し、聖霊の働き、そして復活された主がキリストの体を築き上げられる御業に対して、信仰と信頼を働かせましょう。